

# 学生の体育実技に対する態度と その変容について

西 垣 完 彦

## は じ め に

小稿は、大学の体育実技に対する学生の態度とその変容を、体育実技支持態度および体育実技の学習効果に対する態度を中心に検討しようとするものである。

戦後の教育改革によって、わが国の大学教育のなかに保健体育科目が必修科目としてとり入れられてから30年近く経過した。その間、保健体育科目、とくに体育実技に関しては数多くの地道な調査研究がなされている。そして、体育実技に対する学生の態度について、大学体育協議会<sup>1)</sup>、小林ら<sup>2)</sup>、徳永・佐久本ら<sup>3)</sup>は圧倒的多数の学生が体育実技を必修科目として支持していることを報告している。また、小林<sup>4)5)</sup>、岡野ら<sup>6)</sup>は学生の体育実技に対する態度は一般に好意的であることを明らかにしている。また、態度変容についても体育実技の授業分析を中心に行った、小林<sup>5)</sup>、徳永・荒井<sup>7)8)</sup>、徳永・橋本ら<sup>9)</sup>の研究がある。しかし、体育実技支持態度と体育実技に対する態度とを関連させて分析したものには、2年次の学生の支持態度を中心<sup>10)</sup>に分析した小林らの研究があるのみであって、体育実技支持態度の変容と体育実技に対する態度との関連をみたものは見当たらない。

そこで、小稿では、つぎの4点から体育実技に対する学生の態度とその変容を検討してみたい。

1. 学生の体育実技支持態度は、体育実技履修前後でどのように変容するか。また、体育実技支持態度はどのような要因と関連があるか。
2. 体育実技の学習効果に対する態度は、体育実技履修前後でどのように変容するか。
3. 体育実技支持態度の変容と学習効果に対する態度とはどのような関連があるか。
4. 体育実技支持態度と体育実技授業とはどのような関連があるか。

## 方 法

1. 対象：昭和47・48年度愛知県立芸術大学入学学生で2回の継続調査が得られた男子106名，女子134名，計240名。

2. 時期：1回目の調査は，当該年度の4月，体育実技授業の第1週に実施。2回目の調査は，1年半後の後期の保健体育講義の第1週に実施。なお，1回目の調査は，毎年保健体育科目のガイダンスを行っている第1週の冒頭に大学の保健体育科目に関する予備知識を全く与えない段階で実施したが，それはガイダンスの内容が学生の大学体育実技に対する態度に影響を与えないように配慮したからである。

3. 方法：2回の調査とも質問紙法調査を用いたが，とくに，体育実技の学習効果に対する態度を測る尺度の項目については，小林らが1967年に東海地区所在の21大学に所在する第2学年の学生 約1,000人を対象に行った「保健体育科目に対する学生の態度」の調査項目を用いた。

## 結 果 と 考 察

## 1. 学生の体育実技支持態度とその変容について

表1 体育実技履修前の体育実技支持態度とデモグラフィックな要因との関連

	必 選 廃	わ っ け っ け	計 (標本数)		
	修 択 止	わ っ け っ け			
性 男	56.6	33.0	0.9	9.4	100.0(106)
別 女	56.7	36.6	0.7	6.0	100.0(134)
学 美術	54.1	36.9	0.8	8.2	100.0(122)
部 音楽	59.3	33.1	0.8	6.8	100.0(118)
年 18	56.8	33.3	0.8	9.1	100.0(132)
令 19	56.5	38.7	—	4.8	100.0 (62)
別 20	52.2	39.1	—	8.7	100.0 (23)
21以上	60.9	30.4	4.3	4.3	100.0 (23)
計	56.7	35.0	0.8	7.5	100.0(240)

性 別 : df=1  $x^2=0.127$  n.s学部別 : df=1  $x^2=0.528$  n.s年令別 : df=3  $x^2=0.636$  n.s

表2 「体育実技履修前の体育実技支持態度」×

「高校体育授業の愛好」  
「高校体育授業出席意欲」

	必 選 廃	わ っ け っ け	計		
	修 択 止	わ っ け っ け			
体 育 す き な 方	70.9	20.9	0.9	7.3	100.0(110)
授 業 の 中 間	47.1	45.9	1.2	5.9	100.0 (85)
の 愛 好 き ら い な 方	40.0	48.9	—	11.1	100.0 (45)
授 業 出 席 意 欲	82.6	17.4	—	—	100.0 (23)
かなり 積極的	60.3	30.2	1.6	7.9	100.0(126)
積極的	46.4	44.1	—	9.5	100.0 (84)
かなり 消極的	28.6	71.4	—	—	100.0 (7)

体育授業の愛好 : df=2  $x^2=19.107$   $p<0.01$ 体育授業出席意欲 : df=2  $x^2=10.780$   $p<0.01$

表3 「体育実技履修前の体育実技支持態度」×「スポーツの愛好」「運動欲求」「体力の現状認識」「体力向上意欲」

		必修	選択	廃止	わからない	
スポーツの愛好	好き	67.4	26.1	1.4	5.1	100.0(138)
	中間	46.9	43.2	—	9.9	100.0 (81)
	きらい	23.8	61.9	—	14.3	100.0 (21)
運動欲求	強	73.9	21.7	—	4.3	100.0 (46)
	中	52.2	36.5	1.7	9.6	100.0(115)
	弱	53.2	40.5	—	6.3	100.0 (79)
体力の現状	ある方	68.0	28.0	—	4.0	100.0 (25)
	普通	49.3	41.1	1.4	8.2	100.0 (73)
	ない方	58.5	33.1	0.7	7.7	100.0(142)
体力向上	思う	62.4	29.2	—	8.4	100.0(202)
	思わない	27.8	63.9	5.6	2.8	100.0 (36)

スポーツの愛好：df=2  $\chi^2=17.477$   $p<0.01$   
 運動欲求：df=2  $\chi^2= 5.635$  n.s  
 体力の現状認識：df=2  $\chi^2= 2.552$  n.s  
 体力向上意欲：df=1  $\chi^2=17.057$   $p<0.01$

と、表3に示すように、スポーツの愛好や体力の向上意欲とは有意な関連にあり、スポーツが好きで体力向上意欲の強いものほど、大学の体育実技を必修科目として支持するものが多い。しかし、運動欲求や体力の現状認識とは有意な関連がみられない。

つぎに、1年半の大学での体育実技授業を履修した後の体育実技支持態度をみると、表4に示すように、「必修」科目として支持するもの83.3%、「選択」科目として支持するもの16.7%、「廃止」とするもの0%であるが、「選択」科目として支持したものについて、さらに「必修科目として置くか、あるいは廃止するか whichever かつとしたら、あなたはどちらを選びますか」という設問に対する反応からみると、13.8%のものが「必修」科目でよいとしている。したがって、体育実技を必修科目として支持するものは、消極的必修支持を加えると97.1%となり、圧倒的多数の学生が体育実技を必修科目として支持して

大学の体育実技履修前における学生の体育実技支持態度は、表1に示すように、「性」「年令」「学部」などのデモグラフィックな要因とは関係なく、「必修」科目として支持するもの56.7%、「選択」科目として支持するもの35.0%、「廃止」「よくわからない」とするもの8.3%、である。

態度は一般に過去の生活体験が強く反映しているといわれる。とすれば、体育実技支持態度は過去の体育教育の経験となにかがしかの関連をもつはずである。そこで、高校での体育授業の愛好や出席意欲と大学の体育実技支持態度との関連をみると、表2に示すように、いずれも有意の関連にあり、高校の体育授業が好きで積極的に授業に参加したものほど、大学の体育実技を必修科目として支持するものが多い。また、スポーツの愛好、運動欲求、体力の現状認識と向上意欲との関連をみる

いるといえる。

さらに、履修前後の体育実技支持態度を個人の態度変容からみると、表5に示すように、体育実技支持態度

は有意に変容している。そして、支持態度が体育実技履修後変容したものは、履修前の「わからない」を除いても、全体の約33%となり、学生の約3人に1人が履修後体育実技支持態度を変容したことになる。また、支持態度変容者のうち、80.5%は「選択・廃止→必修」の好意的方向に、19.5%は「必修→選択」の非好意的方向に変容している。

前述したとおり、体育実技履修前の体育実技支持態度は、スポーツの愛好、体力向上意欲、高校体育授業の愛好や出席意欲と強い関連がある。そこで、履修後の体育実技支持態度とこれら諸要因との関連をみると、表6に示すように、「性」「年齢」「学部」などのデモグラフィックな要因や「運動欲求」「体力の現状認識」とは体育実技履修前と同様に有意な関連はみられないばかりか、「スポーツの愛好」「高校体育授業の愛好や出席意欲」「体力向上意欲」とも有意な関連がみられない。このことは、体育実技履修後の体育実技支持態度

表4 体育実技履修前後の体育実技支持態度

	履 修 後					計
	必 修 時間数多く	必 修 時間数現行	選 択 時間数少なく	廃 止 必修でよい	廃 止 廃止でよい	
履 必 修	38.2	50.0	0.7	9.6	1.5	100.0(136)
修 選 択	21.4	52.4	—	20.2	6.0	100.0 (84)
前 廃 止	50.0	50.0	—	—	—	100.0 (2)
前 わからない	33.3	50.0	—	16.7	—	100.0 (18)
計	32.1	50.8	0.4	13.8	2.9	100.0(240)
	83.3			16.7		

df=1 x<sup>2</sup>=8.532 p<0.02  
 (「廃止」「わからない」除く。必修と選択)

表5 個人別にみた体育実技支持態度の変容(%)

		履 修 後	計
		必 選 修 択	
履 修 前	必 修	50.4	56.7
	選 択	25.8	35.0
	廃 止	0.8	0.8
	わからない	6.3	7.5
計		83.3 16.7	100.0

○ 態度変容者  
 ○ 態度非変容者

が、履修前の支持態度形成（規定）要因とは異なる他の要因によって規定されることを示唆しているが、これについては3, 4で若干の検討を加える。

2. 体育実技の学習効果に対する態度とその変容について

大学の体育実技の学習効果に対する態度を、まず態度を測る尺度を構成する項目ごとにみると、表7に示すように、体育実技履修前後とも学習効果を肯定するものが否定するものを上回る項目は、「カタルシス」「運動欲求の充足」「健康の保持・増進」「仲間づくり」「将来の社会生活への寄与」の5項目、学習効果を否定するものが肯定するものを上回る項目は、「体力づくり」「運動技術の向上」「性格づくり」「科学的認識の育成」の4項目、体育実技履修前は学習効果を肯定するものの方が多く、履修後は逆に学習効果を否定するものが肯定するものを上回る項目は「動きづくり」の1項目、体育実技履修前は学習効果を否定するものの方が多く、履修後は逆に学習効果を肯定するものが否定するものを上回るの項目は、「学生生活のうらおい」「運動の生活化」の2項目である。また、態度変容という点からみると、「科学的認識の育成」を除く11項目について、いずれも履修前後で有意差がみられる。そして、「体力づくり」「動きづく

表6 「体育実技履修後の体育実技支持態度」 × 「性別」「学部別」「年令別」「スポーツの愛好」「体育授業愛好」「体育授業出席意欲」「運動欲求」「体力の現状認識」「体力向上意欲」

		必 修	選 択	
性 別	男	84.9	15.1	100.0(106)
	女	82.1	17.9	100.0(134)
学部別	美 術	82.0	18.0	100.0(122)
	音 楽	84.7	15.3	100.0(118)
年 令 別	18	85.6	14.4	100.0(132)
	19	82.3	17.7	100.0 (62)
	20	78.3	21.7	100.0 (23)
	21以上	78.3	21.7	100.0 (23)
ス ポー ツ の 愛 好	好きな方	84.1	15.9	100.0(138)
	中 間	85.2	14.8	100.0 (81)
	きらいな方	71.4	28.6	100.0 (21)
体 育 授 業 の 愛 好	好 き	84.5	15.5	100.0(110)
	中 間	87.1	12.9	100.0 (85)
	き ら い	73.3	26.7	100.0 (45)
体 育 授 業 の 出 席 意 欲	かなり積極的	78.3	21.7	100.0 (23)
	積極的な方	84.9	15.1	100.0(126)
	消極的な方	81.0	19.0	100.0 (84)
	かなり消極的	85.7	14.3	100.0 (7)
運 動 欲 求	強	80.4	19.6	100.0 (46)
	中	82.3	17.7	100.0 (79)
	弱	85.2	14.8	100.0(115)
体 力 の 現 状	あ る 方	76.0	24.0	100.0 (25)
	普 通	83.6	16.4	100.0 (73)
	な い 方	84.5	15.5	100.0(142)
体 力 向 上	思 う	84.6	15.4	100.0(202)
	思 わ ない	75.0	25.0	100.0 (36)
性 別		別 : df=1	x <sup>2</sup> =0.334	n.s
学 部 別		別 : df=1	x <sup>2</sup> =0.338	n.s
年 令 別		別 : df=3	x <sup>2</sup> =1.456	n.s
ス ポー ツ の 愛 好		別 : df=2	x <sup>2</sup> =2.395	n.s
体 育 授 業 の 愛 好		別 : df=2	x <sup>2</sup> =4.250	n.s
体 育 授 業 の 出 席 意 欲		別 : df=2	x <sup>2</sup> =0.938	n.s
運 動 欲 求		別 : df=2	x <sup>2</sup> =0.624	n.s
体 力 の 現 状 認 識		別 : df=2	x <sup>2</sup> =1.077	n.s
体 力 向 上 意 欲		別 : df=2	x <sup>2</sup> =2.036	n.s

り]の2項目を除いて、いずれも学習効果に対する態度は好意的方向に変容している。

つぎに、個人別の態度変容を表8に示すような手続きで分析してみると、表9に示すように、体育実技履修後に態度が変化しなかった非変容群が、履修後に好意的または非好意的方向に変化した変容群を上回る項目は、「健康の保持・増進」「動きづくり」「学生生活のうるおい」「科学的認識の育成」「運動の生活化」の5項目、変容群と非変容群がほぼ同じ項目が、「カタルシス」、変容群が非変容群を上回る項目が、「運動欲求の充足」「体力づくり」「運動技術の向上」「性格づくり」「仲間づくり」「将来の社会生活への寄与」の6項目である。また、変容群だけについてみると「体力づくり」「動きづくり」の2項目では、非好意的方向に変容したものが好意的方向に変容したものを上回っている。しかし、その他の項目ではいずれも好意的方向に変容したものの方が多い。とくに、「仲

表7 体育実技の学習効果に対する態度尺度の項目と体育実技履修前後の反応(変容)

		積極的肯定	消極的肯定	消極的否定	積極的否定	x <sup>2</sup> 検定 (df=2)
1. カタルシス	前	26.3	64.6		9.2	x <sup>2</sup> =25.108 p<0.01
	後	47.9	47.5		4.6	
2. 運動欲求充足	前	24.6	48.8		26.7	x <sup>2</sup> =10.990 p<0.01
	後	38.3	42.1		19.6	
3. 健康の保持・増進	前	62.5		24.2	13.3	x <sup>2</sup> =14.452 p<0.01
	後	78.3		14.2	7.5	
4. 体力づくり	前	44.6		37.5	17.9	x <sup>2</sup> =7.544 p<0.05
	後	32.5		47.1	20.4	
5. 動きづくり	前	13.3	38.3		48.3	x <sup>2</sup> =11.214 p<0.01
	後	5.0	37.1		57.9	
6. 運動技術の向上	前	18.3		37.9	43.8	x <sup>2</sup> =17.900 p<0.01
	後	33.3		37.9	28.8	
7. 性格づくり	前	32.1		34.2	33.8	x <sup>2</sup> =12.174 p<0.01
	後	47.1		29.6	23.3	
8. 仲間づくり	前	7.1	44.6		48.3	x <sup>2</sup> =39.482 p<0.01
	後	18.3	59.2		22.5	
9. 学生生活のうるおい	前	5.0	28.8		66.3	x <sup>2</sup> =15.996 p<0.01
	後	10.4	40.8		48.8	
10. 科学的認識の育成	前	6.3	30.4		63.3	x <sup>2</sup> =1.358 n.s
	後	5.8	35.4		58.8	
11. 運動の生活化	前	47.1		32.1	20.4	x <sup>2</sup> =26.081 p<0.01
	後	66.7		26.7	6.7	
12. 将来の社会生活への寄与	前	17.1	56.3		26.7	x <sup>2</sup> =6.618 p<0.05
	後	26.3	52.9		20.8	

表8 個人の態度変容分析方法の例

	履 修 後		
	A' (積極的肯定)	B' (消極的肯定)	C' (積極的否定)
履 修 前 A (積極的肯定)	AA'	AB'	AC'
B (消極的肯定)	BA'	BB'	BC'
C (積極的否定)	CA'	CB'	CC'

非変容群: AA', BB', CC'

変容群: {好意的方向へ BA' CA' CB'  
非好意的方向へ AB' AC' BC'}

間づくり」「運動の生活化」では、好意的方向への変容者が非好意的方向への変容者の3倍以上も多くなっている。

さらに、各項目に対する反応の内容によって尺度化し（「積極的肯定」2点、「消極的肯定または否定」1点、「積極的否定」0点、を与えるので、尺度値の幅は0～24点となる）、それにもとづいて体育実技の学習効果に対する態度を、好意的（14～24点）、中間的（10～13点）、非好意的（0～9点）の3段階に分類してみると、表10に示すように、体育実技履修前後で有意

表9 項目別にみた個人の体育実技の学習効果に対する態度の変容率(%)

	X 好意的 方向に 変容	非 変 容				Y 非 好 意 的 方 向 に 変 容	変容 の割合 (X/Y) <sub>2</sub>
		積 極 的 肯 定	消 極 的 肯 定	消 極 的 否 定	積 極 的 否 定		
1. カタルシス	37	50(17)	33		1)	13	2.84
2. 運動欲求充足	37	43(14)	22		8)	20	1.83
3. 健康の保持・増進	28	62(53)		5	3)	10	2.80
4. 体力づくり	21	46(19)		20	7)	33	0.63
5. 動きづくり	17	53(3)	18		33)	30	0.55
6. 運動技術の向上	39	43(8)		17	18)	19	2.07
7. 性格づくり	36	47(23)		10	15)	17	2.18
8. 仲間づくり	43	47(3)	28		16)	10	4.08
9. 学生生活のうらおい	33	51(0)	13		38)	15	2.16
10. 科学的認識の育成	22	61(3)	14		44)	17	1.29
11. 運動の生活化	34	56(39)		14	3)	10	3.42
12. 将来の社会生活への寄与	32	48(7)	32		10)	20	1.64

差がみられる。なお、体育実技の学習効果に対する態度は、表11に示すとおり、体育実技履修前は、「スポーツの愛好」「運動欲求」「体力の現状認識」「体力向上意欲」「高校体育授業の愛好や出席意欲」のいずれの要因とも有意の関連をもっている。つまり、スポーツが好きで、運動欲求も強く、体力も普通以上で、かつ、体力向上意欲も強く、また、高校の体育授業が好きで積極的に参加していたものほど、大学の体育実技の学習効果に対する態度は好意的である。これは学生の大学体育実技に対す

る積極的な期待の反映であろう。  
 しかし、体育実技履修後の学習効果に対する態度は、これらの諸要因とは「高校体育授業出席意欲」を除いていずれとも関連をもたない。このことは、体育実技履修前の大学体育実技に対する期待が十分満たされなかったことに起因するのではなく、むしろ、スポーツや高校の体育授業がきらいで、運動欲求も弱く、体力も普通以下で向上意欲もなかった学生たちの態度が好意的方向に変容した結果によるものと考えられる。

表12 体育実技支持態度タイプと体育実技の学習効果に対する態度の変容

		好意的	中間的	非好意的
A	121 前後	41.3	32.2	26.4
		57.0	31.4	11.6
B	64 前後	17.2	28.1	54.7
		42.2	40.6	17.2
C	15 前後	20.0	40.0	40.0
		33.3	26.7	40.0
D	22 前後	9.1	36.4	54.5
		22.7	40.9	36.4

A : df=2  $x^2=10.090$  p<0.01

B : df=2  $x^2=20.712$  p<0.01

C : df=1  $x^2=0$  n.s

D : df=1  $x^2=1.467$  n.s

C, Dタイプは標本数の関係で「好意的」「中間」×「非好意的」

表10 体育実技の学習効果に対する態度の変容

		履修後 好意的	中間的	非好意的	計	
履修前	好意的	14-24点	68.1	26.1	5.8	100.0 (69)
	中間的	10-13点	56.0	33.3	10.7	100.0 (75)
	非好意的	0-9点	22.9	42.7	34.4	100.0 (96)
計			46.3	35.0	18.8	100.0(240)

df=4  $x^2=44.519$  p<0.01

表13 体育実技支持態度タイプ別にみた体育実技の学習効果に対する態度変容 ( $x^2$ 検定)

	A 必修 ↓ 必修	B 選廃 止 ↓ 必修	C 必修 ↓ 選択	D 選 取 ↓ 選 取
カタルシス	(0.000) ***	(3.082) *	(0.000)	(0.193)
運動欲求充足	8.458	7.122	(2.540)	(1.031)
健康の保持・増進	(0.908) ***	(18.526) ***	(0.536)	(4.464) *
体力づくり	9.616 ***	0.427	(0.000)	(0.943)
動きづくり	8.403 ***	(0.031)	(0.543)	(0.834)
運動技術の向上	9.211 ***	9.802 ***	(0.574)	(0.129)
性格づくり	5.238 ***	8.052 ***	(0.170)	0.422
仲間づくり	17.671 ***	(9.556) ***	(4.261) *	(2.277)
学生生活のう おい	6.413 *	(4.033) *	(0.635)	(1.091)
科学的認識の育 成	1.469 ***	(1.863) ***	(0.536)	(0.000)
運動の生活化	(8.033) ***	(8.008) ***	(0.139)	(0.000)
将来の社会生活 への寄与	5.358	1.917	(0.170)	(0.000)

注1. ( )はdf=1 その他は df=2

2. 表中 \* p<0.05 \*\* p<0.02 \*\*\* p<0.01

3. -は非好意的方向への変容を示す。

表11 「体育実技の学習効果に対する態度」 × 「スポーツの愛好」「体育授業の出席意欲」「運動欲求」「体力の現状認識」「体力向上意欲」

	履修前			履修後		
	好意的	中間的	非好意的	好意的	中間的	非好意的
スポーツの愛好	37.7	31.9	30.4	50.0	34.1	15.9
中間的	19.8	32.1	48.1	39.5	38.3	22.2
好き嫌い	4.8	23.8	71.4	47.6	28.6	23.8
体育授業の愛好	44.5	30.9	24.5	56.4	29.1	14.5
中間的	12.9	41.2	45.9	40.0	38.8	21.2
好き嫌い	20.0	13.3	66.7	33.3	42.2	24.4
体育授業の出席意欲	56.5	26.1	17.4	69.6	21.7	8.7
かなり積極的	31.7	38.1	30.2	48.4	35.7	15.9
積極的な方	19.0	25.0	56.0	35.7	38.1	26.2
消極的な方	—	—	100.0	57.1	28.6	14.3
かなり消極的						
運動欲求	37.0	39.1	23.9	52.2	32.6	15.2
強	32.2	30.4	37.4	44.3	40.0	15.7
中	19.0	27.8	53.2	45.6	29.1	25.3
弱						
体力の現状	52.0	28.0	20.0	60.0	20.0	20.0
ある方	19.2	32.6	47.9	42.5	35.6	21.9
普通の	29.6	31.0	39.4	45.8	37.3	16.9
ない方						
体力向上	32.7	30.7	36.6	47.0	33.7	19.3
思う	8.33	3.35	8.33	8.9	44.4	16.7
思わない						

スポーツの愛好: df=4  $\chi^2=20.408$  p<0.01  $\chi^2_3=3.143$  n.s  
 体育授業の愛好: df=4  $\chi^2_3=40.743$  p<0.01  $\chi^2=8.979$  n.s  
 体育授業の出席意欲: df=4  $\chi^2=34.283$  p<0.01  $\chi^2=10.864$  p<0.05  
 運動欲求: df=4  $\chi^2=11.991$  p<0.02  $\chi^2=4.837$  n.s  
 体力の現状認識: df=4  $\chi^2=10.874$  p<0.05  $\chi^2=3.759$  n.s  
 体力向上意欲: df=1  $\chi^2=5.999$  p<0.02  $\chi^2=1.568$  n.s

技を選択として支持。

まず、各タイプ別に体育実技履修前後の体育実技の学習効果に対する態度をみると、表

### 3. 体育実技支持態度の変容と学習効果に対する態度との関連

1で体育実技支持態度が体育実技履修後に変容することを明らかにしたが、ここでは、変容に関与する要因をさぐるために、表8に示したような手続きで、体育実技支持態度をその態度変容の内容から4タイプに分類し各タイプと体育実技の学習効果に対する態度との関連をみることにする。

**Aタイプ**: 非変容群で体育実技履修前後とも体育実技を必修として支持。

**Bタイプ**: 変容群で体育実技履修前は選択または廃止であったが、履修後は必修として支持。好意的方向に変容。

**Cタイプ**: 変容群で体育実技履修前は必修であったが、履修後は選択として支持。非好意的方向に変容。

**Dタイプ**: 非変容群で体育実技履修前後とも体育実

12に示すように、A、Bタイプとも学習効果に対する態度が好意的方向に変容しているものが多い。この傾向はとくにBタイプに顕著である。これに対してC、Dタイプの場合は、履修前後で態度の変容がみられない。

つぎに、各タイプ別に学習効果に対する態度尺度を構成する項目ごとにみると、表13に示すように、Aタイプの場合、体育実技履修前後で態度が変容した項目は、「運動欲求の充足」「体力づくり」「動きづくり」「運動技術の向上」「仲間づくり」「学生生活のうるおい」「運動の生活化」の7項目で、そのうち、「体力づくり」「動きづくり」の2項目は非好意的方向に変容している。Bタイプの場合、「運動欲求の充足」「健康の保持・増進」「運動技術の向上」「性格づくり」「仲間づくり」「学生生活のうるおい」「運動の生活化」の7項目でいずれも好意的方向に変容している。Aタイプと比較して、「健康の保持・増進」と「性格づくり」の2項目で好意的方向に変容し、逆にAタイプで非好意的方向に変容した「体力づくり」と「動きづくり」については変容がみられない。Cタイプ

表14 体育実技支持態度タイプ別の体育実技の学習効果に対する態度の項目別反応(%)と

			カタルシス			運動欲求充足			健康の保持・増進			体力づくり			動きづくり		
			pp	p	cc	pp	p	cc	pp	c	cc	pp	c	cc	pp	p	cc
タイプ別の履修後の反応	履修前	A	36	60	4	30	48	22	77	19	4	55	33	12	16	40	44
		B	17	67	16	22	42	36	48	30	22	34	42	23	13	34	53
		C	40	53	7	13	73	13	60	27	13	20	53	27	7	47	47
		D	14	68	18	23	41	36	32	27	41	41	23	36	9	41	50
	履修後	A	55	42	3	48	35	17	82	14	4	36	47	17	5	40	55
		B	52	44	5	33	52	16	84	8	8	36	45	19	6	39	55
		C	47	47	7	13	40	47	47	33	20	13	60	27	7	27	67
		D	14	77	9	27	55	18	64	23	14	23	36	41	5	32	64
有意差の検定	AとC	(必修→必修) 前	(0.046)			(0.218)			(2.023)			*(5.344)			(0.044)		
		(必修→選択) 後	(0.006)			*** (7.013)			*** (9.592)			(2.053)			(0.693)		
	BとD	(選択→必修) 前	(0.003)			(0.001)			3.235			(0.303)			(0.064)		
		(選択→選択) 後	(0.054)			(0.003)			*(4.255)			(1.301)			(0.535)		

注1. 表中( )の数字は 標本数の関係で df=1 で求めた値

2. \* p<0.05 \*\*\* p<0.01

3. pp は積極的肯定 p は消極的肯定 c は消極的否定 cc は積極的否定

プの場合、「仲間づくり」で好意的方向に変容したのみで、他の項目では体育実技履修前後の変容はみられない。Dタイプの場合、すべての項目で態度変容がみられない。

このように、体育実技支持態度が体育実技履修前後とも必修として支持するものや選択から必修に変容したもものでは、全体的にみて体育実技の学習効果を高く評価しているといえる。しかし、以上の分析だけでは、体育実技支持態度の変容に関与する要因を明らかにすることは不十分である。とくに体育実技支持態度が必修から選択に変容したCタイプでは「仲間づくり」に有意差がみられるが、これは好意的方向への変容であるので支持態度が必修から選択という、いわば非好意的方向に変容した要因とは考えにくい。

そこで、表14に示すように、それぞれのタイプを組み合わせることによって、体育実技支持態度の変容に及ぼした要因をさぐってみる。

**AタイプとCタイプの比較**：これは体育実技履修前は体育実技を必修として支持したが、履修後は必修(A)と選択(B)に分かれた群の比較である。両者間で有意差のみられる項目

タイプ間の有意差検定( $\chi^2$ 検定)

運動技術の向上			性格づくり			仲間づくり			学生生活のうるおい			科学的認識の育成			運動の活性化			将来の社会生活への寄与		
pp	c	cc	pp	c	cc	pp	p	cc	pp	p	cc	pp	p	cc	pp	c	cc	pp	p	cc
20	42	38	40	34	26	9	48	43	7	39	55	8	31	60	56	31	13	21	59	21
19	31	50	22	34	44	6	42	52	5	20	75	2	22	77	39	28	33	17	44	39
27	33	40	20	40	40	—	53	47	—	20	80	7	47	47	33	60	7	7	60	33
18	32	50	27	32	41	—	41	59	—	18	82	9	32	59	36	32	32	14	64	23
37	36	27	55	23	22	23	56	21	15	44	41	7	39	54	73	23	3	34	50	17
31	45	23	42	34	23	14	61	25	8	42	50	2	33	66	64	28	8	17	55	28
47	20	33	33	47	20	—	93	7	13	27	60	9	32	59	47	40	13	7	73	20
27	32	41	36	27	36	18	45	36	—	32	68	7	33	60	36	41	23	23	55	23
(0.078)			(1.585)			(0.074)			(2.571)			(1.029)			(2.712)			(1.246)		
(0.508)			(2.407)			(0.906)			(1.900)			(0.212)			(4.547) <sup>*</sup>			(0.001)		
(0.003)			0.277			(0.373)			(0.426)			(2.484)			(0.109)			(1.923)		
2.654			1.423			(1.051)			(2.184)			(0.303)			(5.124) <sup>*</sup>			(0.243)		

は、体育実技履修前では「体力づくり」「運動の生活化」の2項目、履修後では「運動欲求の充足」「健康の保持・増進」「運動の生活化」の3項目、である。このような有意差が生じた理由はつぎのようであろう。

まず、「体力づくり」についてみると、CタイプはAタイプに比して体育実技授業での体力づくりの効果に否定的であり、その態度は履修後も不変である。これに対してAタイプは履修前では体力づくりの効果を受けていたが、履修後にはこの態度が非好意的方向に変容している。そのために履修後には両者間に有意差がみられなくなったのである。つぎに、「運動欲求の充足」「健康の保持・増進」は、体育実技履修後Aタイプはいずれも好意的方向に変容したのに対し、Cタイプの場合は逆に非好意的方向に変容したものが増加したからである。また、「運動の生活化」は体育実技履修前でも両者間に有意差がみられるが、Aタイプでは履修後好意的方向に変容したものが多かったのに対し、Cタイプでは態度変容がほとんどなかったからである。このことから、体育実技支持態度が「必修」から「選択」に変

容する要因の一つとして、「運動欲求の充足」「健康の保持・増進」「運動の生活化」をあげることができよう。

**BタイプとDタイプの比較**…これは体育実技履修前は体育実技を選択として支持したが、履修後は必修(B)と選択(D)に分かれた群の比較である。両者間で有

表15 「体育実技支持態度」×「出席状況」「出席意欲」「授業計画」

	出席状況			出席意欲			授業計画			
	よい (0 ~ 3)	まあまあ (4 ~ 5)	わるい (6 以上)	きわめて積極的	積極的	消極的	満足	不満もあるが やむをえぬ	もっとよい方法がある	
履修前	26	44	31	11	74	16	38	59	3	
履修後	20	38	43	3	50	48	20	75	5	
タイプ	A	25	42	33	14	69	15	35	63	2
	B	27	44	30	6	78	14	44	50	6
	C	20	33	47	—	67	27	7	87	7
	D	14	41	46	5	36	50	27	68	5
計	25.0	42.5	32.5	9.6	69.6	20.8	35.0	61.3	3.3	

タイプ別	df=3 x <sup>2</sup> =2.993 n.s	df=3 x <sup>2</sup> =19.265 p<0.01	df=2 x <sup>2</sup> =6.380 p<0.05
必修・選択	df=2 x <sup>2</sup> =2.239 n.s	df=1 x <sup>2</sup> =20.696 p<0.01	df=1 x <sup>2</sup> =4.835 p<0.05

注1. DK, NAを除くので100パーセントにならない項目もある。  
2. 出席状況の( )の数字は1年半の体育実技授業の欠席回数を示す。

意差のみられる項目は、体育実技履修後の「健康の保持・増進」と「運動の生活化」の2項目である。このような有意差が生じた理由はつぎのようであろう。「健康の保持・増進」は、両者とも履修前後で好意的方向に変容しており（表13）、履修後の有意差は、Dタイプに比してBタイプに好意的方向に変容したものがより多いからである。これに対して、「運動の生活化」では、これを肯定するものが、履修前後で、Bタイプ=39.1→61.4%、Dタイプ=36.4→36.4%とBタイプに好意的方向への変容者が多い。このことから、体育実技支持態度が選択から必修に変容する要因の一つとして「健康の保持・増進」「運動の生活化」をあげることができよう。

#### 4. 体育実技支持態度と体育実技授業について

体育実技支持態度やその変容は、体育実技の学習効果に対する態度のほかに、体育実技授業の内容や教官の指導法などにもなにかしかの影響を受けると思われる。と同時に、そ

「教官のすすめ方」「3, 4年次体育実技開講」「参加意欲」

教官のすすめ方			3, 4年次の開講			3, 4年次体育実技の参加意欲					計 (標本数)
満 足	不 満 も あ る が ぬ	も つ と よ い 別 の 方 法 が	開 講 し て ほ し い	必 要 な い	ど ち ら で も よ い	ぜ ひ 参 加 し た い	で き る 参 加 し た い	多 分 参 加 し な い	参 加 し な い	ど ち ら と も え な い	
58	39	2	61	5	34	19	59	6	1	15	100 (200)
48	53	—	30	18	53	8	38	18	5	33	100 (40)
55	41	3	69	3	28	26	59	3	1	12	100 (121)
61	38	2	53	8	39	6	63	11	2	19	100 (64)
47	53	—	47	20	33	20	53	13	7	7	100 (15)
50	50	—	14	18	68	—	27	23	5	46	100 (22)
55.8	41.3	1.7	55.8	7.1	36.7	17.1	55.4	7.5	1.7	17.9	100.0(240)
df=3 x <sup>2</sup> =1.505 n.s			df=3 x <sup>2</sup> =24.676 p<0.01			df=3 x <sup>2</sup> =32.453 p<0.01					
df=1 x <sup>2</sup> =1.600 n.s			df=2 x <sup>2</sup> =16.534 p<0.01			df=1 x <sup>2</sup> =18.756 p<0.01					

れはまた、1年半の体育実技授業の出席状況や出席意欲とも関連すると考えられる。そこでこの点をみたのが表15である。

まず、体育実技支持態度及び変容タイプと1年半の体育実技出席の状況や意欲との関連についてみると、出席状況の場合、態度及び変容タイプのいずれとも有意な関連はみられない。しかし、出席意欲についてはいずれも有意の関連があり、体育実技を選択として支持するものの半数近くが体育実技の授業に消極的であり、また、支持態度変容タイプとの関連ではDタイプ、つまり履修前後とも体育実技を選択として支持する非好意的非変容群の半数が体育実技の授業に消極的であったことを示している。このように、出席状況が支持態度と関連をもたないことの理由の一つは、体育実技単位認定の際、実授業時間数の80%以上の出席を条件の一つとしていることと関係があるかも知れない。つまり、1年半3期約40回の授業回数で6・7回位は出席意欲に反して病気やケガなどの事由で欠席を余儀なくされるものと、単位修得のみの目的で出席する消極的なものとの区別が判然としない、ということも考えられるからである。

つぎに、体育実技の指導内容と教官の指導法との関連についてみると、指導内容に有意差がみられ、運動教材の内容や数、選択の方法、年間計画、雨天時の授業などに不満を感じているものが選択支持者に多い。この傾向は支持態度変容タイプとの関連からみると、Cタイプ、つまり必修から選択の非好意的変容群に著しい。逆に、選択から必修の好意的変容群では、他のタイプに比し指導内容に対する満足度が高い。しかし、教官の指導法（授業のすすめ方）と体育実技支持態度とは関連がみられない。小林らは、体育実技支持態度は授業内容や教官の指導法とは無関係に決まると報告しているが、少なくとも授業内容は体育実技支持態度を規定する要因の一つと考えられる。<sup>10)</sup>

さらに、3、4年次の体育実技の開講と参加意欲との関連についてみると、いずれも有意の関連がみられ、体育実技を必修として支持するもののうち61%が開講を希望し、開講必要なしとするものは5%にすぎない。

また、参加意欲についても「できるだけ参加したい」ものを含めると、参加意欲をもつものは必修群で78%、選択群で45%である。これを支持態度変容タイプ別にみると、参加意欲はA>C=B>Dとなっている。

## ま と め

学生の大学体育実技に対する態度を、体育実技履修前と履修後の体育実技支持態度及び体育実技の学習効果に対する態度を中心に分析した。おもな結果はつぎのようである。

1. 大学の体育実技を必修科目として支持するものは、体育実技履修前は約57%であるが、履修後は約83%に増加した。また、履修後に支持態度が変容したものは約33%で、そのうちの81.5%は好意的方向（「選択」「廃止」→「必修」）に、19.5%は非好意的方向（「必修」→「選択」）に変容した。

2. 体育実技履修前の体育実技支持態度は、「性」「年齢」「学部」などのデモグラフィックな要因や運動欲求、体力の現状認識とは関係なく、スポーツの愛好や高校での体育授業の愛好及びその出席意欲とのみ有意な関連をもつ。しかし、履修後の支持態度はこれらの諸要因とすべて関連をもたない。

3. 体育実技の学習効果に対する態度は、全体的にみて、履修後好意的方向に変容しているが、この傾向はとくに、体育実技履修前に、スポーツや高校での体育授業がきらいで、体力も普通以下であり、運動欲求や体力向上意欲の弱かったものに顕著である。

4. 体育実技の学習効果に関する項目別の履修後の態度（反応）が、大学の体育実技の経験をダイレクトに反映しているとすれば、本学の体育実技は、「体力づくり」「動きづくり」という点では逆機能を果していることになる。しかし、これは高校段階までは週2～4回ある体育の授業が大学では週1回に減少しているという量的側面をも考慮する必要がある。これに対して、「カタルシス」「運動欲求の充足」「健康の保持・増進」「運動技術の向上」「性格づくり」「仲間づくり」「学生生活のうらおい」「運動の生活化」「将来の社会生活への寄与」という点では順機能を果しているが、とくに、「仲間づくり」「運動の生活化」の2項目で効果が顕著である。しかし、「体育の科学的認識の育成」という点ではほとんど機能していない。

5. 体育実技履修後に体育実技を必修科目として支持するものは、体育実技の学習効果に対する態度は好意的である。また、履修前と比較して好意的方向に変容している態度項目が多い。これに対して、履修後に体育実技を選択科目として支持するものは、体育実技の学習効果に対する態度はそれほど好意的ではないし、態度が変容した項目もほとんどみられない。

6. 体育実技支持態度が、体育実技履修後に、必修→選択または選択→必修、に変容する要因として、とくに、学習効果との関連についてみると、「運動欲求の充足」「健康の保持・増進」「運動の生活化」の3つが強く関与している。このことは、大学の体育実技が学生に必修科目として支持されるためには、学生の最低限の運動欲求を満足させるとともに、学習が健康の保持・増進に役立つという認識をもたせ、さらに、体育実技の授業がその場かぎりのものでなく、学習で得た技術や知識を活用して課外に運動しようとする意

欲を持たせうる，そういう授業を創り出していくことが重要であることを示唆している。

7. 体育実技支持態度は，体育実技授業の出席意欲と関連をもつが，出席状況や教官の指導法とは関連をもたない。

8. 3，4年次に体育実技開講を希望するものは約56%，また，参加意欲のあるものは約73%である。

後記：本研究での統計的処理は，名古屋大学大型計算機センターを利用して行った。

注

1. 大学体育協議会「大学保健体育の現状とその必要性について」，pp. 4～6. 1961
2. 小林篤・徳永幹雄・桑野豊「大学の保健体育科目に対する学生の態度構造に関する研究Ⅰ」九州大学体育学研究3～5, pp. 69～78. 1967.
3. 徳永幹雄・佐久本稔「大学における体育・スポーツの社会的研究—とくに学生の体育・スポーツに対する態度について」体育学研究 12—5, p. 32, 1968
4. 小林篤「大学の保健体育科目に対する学生の態度構造に関する研究(Ⅱ)」名古屋大学教養部紀要12, pp. 54—74, 1968
5. 小林篤「体育実技に対する学生の態度構造と変容」体育学論叢(Ⅱ)日本図書, pp. 54—74, 1970
6. 岡野崇彦ら「大学の正課体育実技の教育効果に関する研究(5)—体育実技授業に対する態度—」東京大学体育学紀要6, pp. 27—32, 1972.
7. 徳永幹雄・荒井貞光「体育実技に対する態度の変容とその要因」九州大学体育学研究 4—5, pp. 27—36, 1972
8. 徳永幹雄・荒井貞光「同上(第2報)」体育学研究18—5, pp. 287—295. 1974.
9. 徳永幹雄・橋本公雄「同上(第3報)—履修開始時から終了までの変化について—」九州大学体育学研究5—3, pp. 34—40. 1975.
10. 小林篤ら「保健体育科目に対する学生の態度」東海地区大学保健体育研究会：大学における増健活動の推移とその発展に関する総合的研究, pp. 73—85, 1968.